三輪山真長寺文化財保存会だより

令和8年4月1日発行 ●第60号 ●発行者：安藤征治 ●編集：三輪山真長寺文化財保存会　　題字：真長寺元住職　三輪　醇證

真長寺で大黒天発見
大黒天と真長寺・三輪神社の繋がり

八事山興正寺　僧侶　西山海良

その昔、真長寺は三輪神社の別当寺として繁栄していました。

「別当寺」とは、神社を管理するために置かれた寺院のこと。神前読経など神社の祭祀を仏式で行い、その主催者を別当（社僧の長のこと）と呼んだことから、別当のいる寺院を別当寺と称しました。

そして長らくの間、真長寺では神仏習合のもと三輪神社の管理を担っておりました。

神仏習合とは、日本古来の神道信仰と、大陸から伝来した仏教が融合し、神と仏を同一とし、互いの信仰や儀式を取り入れて一つの信仰体系としたものです。

その中では本地垂迹説という考え方があり、仏さま（本地）が人々を救うために、日本の神さま（垂迹）の姿を借りて現れたという神仏習合思想が生まれました。平安時代から広まり、神社の神さまに本地仏が割り当てられ、神仏一体の信仰が深まりましたが、明治時代初期の神仏分離令により衰退しました。

さてこの度、真長寺の本堂内の整理をした折に、古い厨子に納まった一體の仏像が発見されました。その厨子の中には「大黒天」が納まっておりました。

厨子は扉が外れかけて壊れた状態で、中の大黒天は虫食いが進んでおり少し痛々しいお姿ですが、とても威厳のある御尊顔の大黒天さまです。

「大黒天」とは、インド神話の破壊神マハーカーラ（摩訶迦羅）が日本で姿を変え、七福神の一尊として親しまれるようになった天部の神様です。元は恐ろしい戦闘神でしたが、日本では「マハーカーラ」の名を「マハー」を「大（偉大なる）」、「カーラ」を「黒（暗黒）」と訳し「大黒天」と名付けました。そして名前の響き、「大黒」と「大国」の音が同じであることから大国主神と習合し、五穀豊穣、商売繁盛、家内安全、財運向上などをもたらす福徳の神様として信仰されています。一般的には、頭巾をかぶり、大きな袋を背負い、打ち出の小槌を持ち、米俵の上に立つ姿で知られています。

大黒天と三輪神社の御祭神である「三輪大明神」は神仏習合に於いて同一の存在として信仰されました。

まず、三輪大明神の別名として、大国主神、「大物主神」、大己貴神などの名が挙げられます。

また、大神神社（奈良県桜井市）に伝わる『三輪山縁起』における記述では、三輪山の神木である「あや杉（神杉）」に、大黒天が姿を現した（影向した）とする伝承が記され、三輪大明神は、仏教の守護神である「大黒天」の化身であると明記されています。

この度、発見された大黒天さまは真長寺と三輪神社の繋がりをあらためて再確認するものであり、神仏習合時代のお寺の姿を彷彿とさせるものであると感じております。現在は真長寺本堂内にお祀りしておりますので、是非ご参拝いただければと思います。